#### 研究成果報告書 科学研究費助成事業

6 月 2 1 日現在 今和 元 年

機関番号: 32617

研究種目: 基盤研究(C)(一般)

研究期間: 2015~2018

課題番号: 15K02986

研究課題名(和文)東国における初期仏教文化の導入と展開

研究課題名(英文)Introduction and expansion of early Buddhist culture in the east country

#### 研究代表者

酒井 清治(SAKAI, KIYOJI)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号:80296821

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文):武蔵国の仏教伝来は、滑川町寺谷廃寺創建に始まるが、東日本の中でも最も早く7世紀前半であった。7世紀後半には東松山市大谷瓦窯跡で棒状子葉軒丸瓦が生産されたが、いまだ供給先は判明していないが、同系の軒丸瓦が南比企丘陵窯跡群赤沼窯跡で焼成され、坂戸市勝呂廃寺の創建瓦となった。この棒状子葉軒丸瓦は、比企郡南部から入間郡北端部に分布するのは、物部系の氏族との関連が考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義 東日本の仏教伝来は、考古学資料から7世紀前半の630年代以降と結論づけたが、その地は古墳や官衙等のない 地域であった。そこに寺院を建立したのは物部連(直)兄麻呂と想定した。その後当地に棒状子葉軒丸瓦という 特徴ある瓦当文が分布することから、地方の仏教受容の過程を明らかに出来た。また、勝呂廃寺の瓦を継続して 生産した南比企丘陵窯跡群は、古代において関東最大の窯跡群に発展する端緒となっており、新来の文化導入が 地方発展に結びついた事例である。

研究成果の概要(英文): The Buddhist tradition of Musashi country begins in Namegawa-machi Terayatu (寺谷) Abandoned Temple, but it was the first half of the 7th century among the eastern Japan. In the late 7th century, round-shaped roof tiles was produced at the Ooya(大谷) kiln of tiles of Higashi-Matsuyama City, but the supply destination has not yet been determined. The same kind of round-shaped roof tiles was fired on the south Hiki hills ruins group Akanuma(赤沼) kiln of tiles, and it became a founding tile of Sakado city Suguro(勝呂) Abandoned Temple. This round-shaped roof tiles is distributed from the southern part of Hiki-gun to the northern end of Iruma-gun may be related to the Mononobe(物部) genealogy clans.

研究分野:考古学

キーワード: 仏教文化 跡群 初期寺院 寺谷廃寺 大谷瓦窯跡 棒状子葉軒丸瓦 勝呂廃寺 7世紀後半 南比企丘陵窯

## 様 式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19(共通)

#### 1.研究開始当初の背景

- (1) 平成 23 年~26 年の科研で、それまで6世紀末、あるいは7世紀後半といわれた滑川町寺 谷廃寺の創建年代を、630 年代以降で7世紀第2四半期におさまると考えた。創建に関わった のは、『聖徳太子伝暦』に見られる武蔵国造になった物部連(直)兄麻呂と想定した。
- (2) 寺谷廃寺の素弁軒丸瓦と比企郡に分布する棒状子葉軒丸瓦との関係について、検討が不十分であった。そのため東日本最古の寺院が作られているものの、その後どのように展開していったか不明確であった。

### 2.研究の目的

- (1) 滑川町に東日本最古の寺谷廃寺が建立されたものの、その後どのように寺院が展開していったのか探ろうと考えた。関東の群馬県では山王廃寺が、千葉県では龍角寺が7世紀後半に創建され、その後もそれぞれの地に寺院の建立されていった。しかし、埼玉県では7世紀前半に寺谷廃寺が建立されたものの、その後7世紀後半(7世紀第4四半期)まで寺院の建立が確認できず様相が不明確であることから、どのように寺院が存続したのか検討する。
- (2) 具体的には寺谷廃寺の瓦の再検討を行い、その後に出現する大谷瓦窯跡出土瓦の技法の分析、勝呂廃寺の文様と技法の分析と変遷から地方の仏教文化の展開を探ろうとした。また、勝呂廃寺に供給した南比企丘陵窯跡群の赤沼瓦窯跡の瓦も技法、文様、胎土を分析し、勝呂廃寺の瓦と比較検討を行う。

#### 3.研究の方法

- (1) 寺谷廃寺の瓦で胎土分析のために未実測であった瓦の実測・拓本の資料化と素弁軒丸瓦の系譜の検討を行う。これまでも寺谷廃寺の瓦は実測を行ってきたが、未実測を含めることにより、寺谷廃寺の出土瓦すべての資料化をめざす。
- (2) 最初に棒状子葉軒丸瓦を焼成した大谷瓦窯跡出土瓦、周辺出土瓦の理化学的胎土分析を行い、大谷瓦窯跡の瓦を分析から明らかにすると共に、東松山市周辺の出土瓦の需給関係を明らかにする。
- (3) 勝呂廃寺出土瓦の時期区分を行い、出土瓦の理化学的胎土分析を進める。
- (4) 勝呂廃寺の発掘調査を行い、考古学的に勝呂廃寺の解明の糸口を見つけ、創建に関わった勢力と寺院跡の解明に向け情報を収集する。

#### 4. 研究成果

- (1) 寺谷廃寺出土瓦の集成は完成したが、系譜が飛鳥寺系か百済直系か細部の手法の比較が十分に出来ず断定できなかった。しかし、滑川町が継続して寺谷廃寺の調査を行ってきたが、寺院跡など遺構や出土瓦なども検出できなかった。そのため、科研で行った資料集成は寺谷廃寺を検討する上に重要な資料となろう。
- (2) 東松山市埋蔵文化財センターの協力を得て、大谷瓦窯跡出土瓦の胎土分析を行った。分析結果を以前分析した寺谷廃寺・平谷窯跡・羽尾窯跡と照合した。その結果、大谷瓦窯跡は平谷窯跡・寺谷廃寺の瓦と羽尾窯跡の須恵器とは領域がやや異なることがわかり、大谷瓦窯跡と平谷窯跡・寺谷廃寺は、それぞれ生産地と供給先が異なることが判明した。
- (3) また、東松山市内の出土瓦も一緒に提供していただき、胎土分析を行った。その結果、資料の中に複数の平行叩きを持つ瓦については、南比企丘陵窯跡群のデータと近いことが判明し、肉眼的観察でも確認できた。東松山市内にも勝呂廃寺 期の瓦が南比企丘陵窯跡群から供給されているようで、古代氏族の広がりと関わると想定できる。
- (4) 鳩山町教育委員会から赤沼窯跡の出土瓦を借用し検討を行ったところ、長斜格子叩き、長格子叩き、平行叩きを持つことから、勝呂廃寺の瓦の供給先と確認できた。
- (5) 勝呂廃寺初期の棒状子葉軒丸瓦は、蓮華文が12葉、10葉、8葉の3種があるが、鳩山町赤沼窯跡から12葉と8葉の軒丸瓦が出土しているが、瓦当文と丸瓦の接合方法が異なる。12葉は瓦当文背面を弧状に指で窪ませて丸瓦を差し込むのに対して、8葉は瓦当背面を平坦にしたところに丸瓦を接合することから、12葉軒丸瓦のほうがより古い技法といえよう。また、弁の横断面が丸みを持つ12葉、10窯と、弁の中央に鎬状に稜を持つ8葉の違いがあり、中房の高さはほとんど無い後者が新しく期と考えた。また、10葉は横断面が12葉よりも高まりがあり、子葉が東松山市大谷瓦窯跡と同様長く、弁端も桜花状につくり精緻であることからも、10葉 12葉 8葉の変遷を考え、10葉を期、12葉を期から期の過渡期、8葉を期と想定した。
- (6) 赤沼窯跡と勝呂廃寺の桶巻き作りの丸瓦と平瓦は、変形長格子と長斜格子叩きが長さ 42.0 ~ 42.5 cmで平均 42.3 cmであったが、平行叩きが 37.2 ~ 41.5 cmで平均 38.6 cmと、前者が長く大きい。また、桶巻きの枠板痕も変形長格子と長格子叩きの瓦は、2.0 ~ 3.4 cmで平均 2.6 cmであったが、平行叩きは 1.7 ~ 3.0 cmで平均 2.3 cmと、前者の方が枠板痕の幅が広く、古い様相を持つことが分かった。すなわち、 期の 10 葉と 12 葉軒丸瓦に主に変形長格子と長斜格子叩きが伴い、 期の 8 葉軒丸瓦に平行叩きが伴う可能性が高い。
- (7) 勝呂廃寺の出土瓦から時期区分を行い5期に区分できた。 期:7世紀第4四半期、 期:7世紀末~8世紀初頭、 期:8世紀前半、 期:武蔵国分寺創建期、 期:武蔵国分寺塔再建期。渡辺一氏は 期の棒状子葉軒丸瓦の前に、石田1号窯出土の平瓦を創建1期と考えたが、

勝呂廃寺では確認できず、供給先は今後の検討課題である。

- (8) 勝呂廃寺と赤沼窯跡の丸瓦は桶巻き技法であることが特徴である。この技法を追ったところ、東日本に広く分布することが分かった。最も古いのは尾張元興寺であったが、岐阜県寿楽寺、群馬県上植木廃寺などを経由した可能性が高いものの、東海道からの系譜も想定でき結論は出なかった。
- (9) 棒状子葉軒丸瓦は、菱田哲郎氏により奈良県山田寺を標式とする単弁軒丸瓦の山田寺亜式とする見解があった。酒井は当地で寺谷廃寺の素弁軒丸瓦から棒状子葉軒丸瓦へ変遷したと想定した。勝呂廃寺の資料を詳細に観察したところ、棒状子葉8葉軒丸瓦の中に外区が斜縁になり細い圏線が数本確認できた。この資料は山田寺式軒丸瓦外区圏線の変容形態と考えた。しかし、素弁軒丸瓦の寺谷廃寺に棒状子葉軒丸瓦が使われていることを考えると、外区に圏線のない棒状子葉軒丸瓦は単弁の情報を基に素弁軒丸瓦を改笵して当地で造り出されたと想定した。(10) 勝呂廃寺の中にあまり注目されてこなかった、型押廉状文軒平瓦がある。この瓦はスタンプ文系で、類例は桑名市南小山廃寺、名古屋市小幡西新廃寺、西尾市寺部廃寺、豊橋市医王寺廃寺、浜松市楠木遺跡(大畠遺跡)と東海西部に分布する。南小山廃寺では7世紀第4四半期、三河地域では7世紀末から8世紀前葉とすることから、勝呂廃寺例は 期におけよう。型押廉状文軒平瓦の伝播経路等については課題であるが、枠板模骨痕の伝播との関連も考慮する必要があろう。
- (11) 勝呂廃寺の出土瓦は、白色針状物質が混入することから、 ・ ・ ・ 期の瓦は、鳩山町南比企丘陵窯跡群で生産されていることが判明しているが、 期の交差波状文軒丸瓦は産地が不明である。坂戸市の協力を得て 43 点の X 線回析試験、化学分析を行ったところ、両分析とも整合性が示され3つのタイプに分類できた。南比企丘陵窯跡群と異なり、鉄分の含有量が多いこと、赤色から赤褐色の特徴を持ち、平瓦は大きな長方形格子叩きであることから、創建からの窯場ではなく、勝呂廃寺付近で生産したと想定した。寺域の区画溝が8世紀前半と考えられ、 期の交差波状文軒丸瓦 4 種が、複弁から単弁へ順次型式変遷していることから、8世紀前半に大規模な整備が行われ、それに対応するように寺に近接して窯場を設置したようである。その一つが重弧文軒平瓦を出土する上宿瓦窯跡であろう。
- (12) 駒澤大学考古学研究室と坂戸市教育委員会とで共同調査を行った。一カ所は勝呂神社古墳で、近接する勝呂廃寺との関わりを検討するためであった。古代瓦が出土したことから、勝呂廃寺の瓦が周辺で利用されたか、あるいは再利用されたことが判明した。また、墳径が41.3 mと大型で、7世紀前半と考えられることから、のちに勝呂廃寺の創建に関わった氏族の墳墓の可能性もある。
- (13) もう一カ所は勝呂廃寺の調査で、G地区を設定し寺域の南側区画溝を発掘した。溝の幅は約2.5m、深さ1.24mのV字状でやや箱薬研形であった。溝底から70cm上に瓦が多く堆積する面があり、その下から馬の下顎骨、四肢骨が出土した。東側のC地区の調査での見解や、溝断面がV字状のであることから、中世の可能性もあったが、馬骨に近接して9世紀後半の灰釉陶器椀の破片が出土したことから、古代と考えてよいが9世紀後半を遡らないようである。溝の最下層には 期の瓦は見つかっていないことから、8世紀前半に伽藍整備した時の区画溝と推測した。
- (14) 勝呂廃寺は田中一郎氏によって、伽藍配置は四天王寺式と想定されている。その理由は身舎桁行4間、梁行2間で四面廂を持つ掘立建物跡が見つかり、南側に版築された基壇が検出され礎石建物跡の基礎と考えられる根石が複数確認され、両建物跡がほぼ南北に並ぶことからである。礎石建物跡の西に銅製の相輪あるいは水煙の一部が出土した基壇は塔跡と想定されていることから、四天王寺式とはいえないであろう。今回調査した南側区画溝と礎石建物跡が近接していること、南側区画溝が掘立建物跡と礎石建物跡を結ぶ南北軸から東へ約70m延びていることから、寺域が東に広がり建物が確認される可能性が高い。なお、礎石建物跡の南方の寺域外に南北道路跡が見つかっていることから、礎石建物跡と掘立建物跡を結ぶ軸線は当時から意識されていたようである。
- (15) 勝呂廃寺の東側約 400mに東山道武蔵路が南北に走り、武蔵路西側に近接して径 41.3mの勝呂神社古墳、武蔵路の東には前方後円墳の雷電塚古墳、勝呂廃寺の西方には前方後円墳胴山古墳、さらに西には方墳の新山 2 号墳が存在する。6世紀中葉以降、雷電塚古墳→胴山古墳→勝呂神社古墳→新山 2 号墳と7世紀中葉まで大型の古墳が築造された後、勝呂廃寺が建造されたことから当地の首長層が建立に関わっていよう。また、塔を持ち、5期に亘り存続する武蔵でも最大級の寺院であることから、入間郡の郡寺でもあろう。

勝呂廃寺の瓦は、滑川町寺谷廃寺の素弁軒丸瓦の系譜を引き、郡を越えて比企郡の南比企丘陵 窯跡群を窯場として瓦を生産している。寺谷廃寺の造営を『聖徳太子伝暦』に見られる、633 年に武蔵国造となった物部連(直)兄麻呂と考えたが、勝呂廃寺の建立者も入間郡を本貫とし、 従五位下として造東大寺次官となった、物部直広成の一族と推定した。物部直広成ら一族6人 が入間宿禰となったことから、この地に同族が広がっていたのであろう。比企郡南部から入間 郡北部にかけて勝呂廃寺 期の軒丸瓦や丸・平瓦が分布することも関連があると考えた。酒井や 荒井秀規が論述したように、物部直広成かその一族が入間郡司と考えるならば、勝呂廃寺も郡 寺であった可能性は高い。勝呂廃寺 期には、寺院近くに窯場を設け、新たな文様である交叉 波状文複弁軒丸瓦を屋根に葺き、寺域を溝で囲うなど寺の整備を行ったようである。勝呂廃寺 は、相輪(水煙か)を持つ塔が存在しており、 期に塔を建立した可能性もあるが詳細な検討 が必要である。なお、入間郡には 769 年西大寺に墾田、林、商布、稲などを献上した大伴部赤男がいたが、その関係については検討できなかった。

勝呂 期の国分寺建立期は、南比企丘陵窯跡群で上野国佐位郡上植木廃寺の一本造り軒丸瓦を生産し、武蔵国分寺の創建初期の建物に使用した。この武蔵国分寺 1 期の瓦は上野系軒丸瓦である。また続く武蔵国分寺 2a 期の創建段階の瓦も南比企丘陵窯跡群で焼成し、国分寺に供給するとともに勝呂廃寺にも使用された。このように、武蔵国分寺創建にあたっては、南多摩窯跡群とともに南比企丘陵窯跡群の果たした役割は大きく、それを主導したのは勝呂廃寺を建立した入間郡司であった物部直広成の家系であろう。その後も勝呂廃寺 期、武蔵国分寺塔再建期にも、入間郡の東金子窯跡群とともに南比企丘陵窯跡群でも瓦生産を行い、国分寺、勝呂廃寺で使用されていることから、9世紀中葉までは法灯を守っていたようである。しかし、南区画溝の堆積からみるに、窪みが確認できる程度埋まっていたようであるが、終焉は確認できていない。

(16) まとめとして、東日本で大きな古墳のない地域に最初に寺谷廃寺を造営したことは、在 地首長と関わりがないことから、その建立者を武蔵宿禰となった物部連(直)兄麻呂と考えた が、なぜ滑川の地を選んだのであろうか。

7世紀第3四半期に、東北へ4.2kmの有階有段の大谷瓦窯跡で瓦を焼成したことは、東方に棒状子葉軒丸瓦を葺く寺院が存在したためであろう。大谷瓦窯跡は東山道武蔵路の西側に近接するが、武蔵路を南下した勝呂廃寺北には、武蔵路から分かれて北北東に向かう西吉見古代道路跡が確認されている。この道沿いの南側には比企郡家推定地(寺谷廃寺から南東約9km)が、北側には横見郡家推定地(寺谷廃寺から東へ約7.5km)がそれぞれ近接する。また、横見郡は安閑紀に見られる武蔵四處の屯倉の一つである、横渟屯倉推定地とされる。武蔵路から分岐する西吉見古代道路跡の延長には埼玉古墳群、若小玉古墳群があることから、武蔵路からの分岐点付近は交通の要衝だったと考えられる。7世紀前半の寺谷廃寺、7世紀第3四半期の大谷瓦窯跡から瓦を供給した寺院が、この付近に継続して造営されたことは、何らかの官衙的施設が存在したためであろうが、寺谷廃寺は評の設置よりも遡ることから、横渟屯倉の殖産事業として、羽尾窯跡、平谷窯跡の操業や寺谷廃寺の造営がなされた可能性もあろう。

素弁軒丸瓦から棒状子葉軒丸瓦の広がりは、物部連(直)兄麻呂から物部直広成の物部勢力下で起こった当地の仏教文化の広がりといえよう。

# 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

<u>酒井清治</u>、総論 土器からみた渡来人研究、考古学ジャーナル 査読無、711 号、2018、3 - 4、

<u>酒井清治</u>、古墳時代における古墳と窯跡の須恵器、季刊考古学、査読無、142、2018、14 - 17

酒井清治、須恵器生産、季刊考古学、査読無、137、2016、27-31

## [学会発表](計1件)

酒井清治、生産の考古学 窯業 、日本考古学協会第85回総会、2019、

## [図書](計6件)

<u>酒井清治</u> 他、府中市、新府中市史 原始・古代資料編1考古資料1、2019、343(272 273・275 276・280・284・290・298・309・314)、

酒井清治 他、ニューサイエンス社、古瓦の考古学、2018、297(213 - 232)、

<u>酒井清治</u> 他、埼玉県教育委員会、埼玉古墳群出土の須恵器について、2018、332(169 - 192)、

<u>酒井清治</u> 他、雄山閣、積石塚大全、2017、332(278 - 286)、

酒井清治 他、芙蓉書房出版、考古学・博物館学の風景、2017、542(133 - 150)、

酒井清治 他、同成社、日本古代考古学論集、2016、679(424 - 438)、

#### 〔その他〕

ホームページ等 なし

- 6.研究組織
- (1)研究分担者 なし
- (2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。